

亀田鵬齋草書考

—『醉銘帖』「題漁樵問答」を中心として—

亀田 絵里香（有鵬）

はじめに

『醉銘帖』(図一)は、文化十四年(一八一七)、亀田鵬齋(一七五二—一八二六)六十六歳の春に書かれ、没後七年の天保四年(一八三三)に開版された、鵬齋唯一の法帖である。内容は、失姓氏の「醉銘」を楷書で、明の莊希俊(生卒年不詳)の「題漁樵問答」を草書で書いたものである。

鵬齋の書の中でも草書はとりわけ有名であり、現存する遺墨も、草書体の作品が最も多いとされている。これは、当時から需要が多かった証しでもあるが、同時に贋作も多く出回るといふ結果を招いている。

そこで、翻刻ではあるが信憑性の高い資料として知られる『醉銘帖』の草書「題漁樵問答」について、考察を試みることにしたい。

一、鵬齋の草書に関する歴代の評価

後世における鵬齋の草書に対する評価については、次のような記録が見られる。

①晩年ニ臨池ノ技ヲ好ミ、殊更ニ草楷ヲヨクス。
—青柳東里『統諸家人物誌』文政十二年(一八二九)

②蓋し本邦に流布せる懷素の搨本は、自叙・聖母及び千字文の三種あり。師(良寛)は自叙帖を、鵬翁は千字文帖を倣ひたり。
—西郡久吾「詩文並書道」(『沙門良寛全伝』)大正二年(一九一三)

③龜田鵬齋は、…且夫北山、狂齋等は文を能くすと雖も、翰墨の餘技に至りては鵬齋挺然として儕輩を抜けり。…其の書道に於けるは蓋亦意を用ゐたること少なからざる者の如し、其の楷法は偃蹇突怒山中の瘦松の如く、其の草體は縦狂迷

離雨後の亂葛に似たり、腕を役するに氣を帥とし、酒を使ひて筆を行る、故に渠の書を觀るは之を法象の外に於てすべし、而して自からその妙あるを知り得べし。(黒木欽堂記)

—「鵬齋眞蹟新梅莊記稿本」(『書苑』第五卷第二號) 大正四年(一九一五)

④氣度宏遠博學能文天下に敵なし。然れども折衷學を唱ふるを以て志を時に得ず。常に杯酒に親しみ、一生を窮巷に終ふ。書を能くす。楷は歐柳より出て、筆法圭角多し。草は圓暢渾流全く之に反す。又醉中畫山水を作る。疎豪放逸、法とする所有るに非ず。意に任せて之を作るのみ。而かも風韻饒し。

—杉原子幸『日本書畫落款印譜』 大正四年(一九一五) 松山堂

⑤我邦の古代は姑く置き、近世では龜田鵬齋、僧良寛、僧寂嚴の草書、佐々木志津馬の楷書大字は、支那人に見せても恥かしくない。

⑥鵬齋の楷書出歐柳。故筆鋒多圭角。而至行草共円渾流暢、全与是反。至於画、平淡清遠又自異於二者。然一書一畫、自有自家之法、不与尋常文人同尚是当時巨匠。

—中根香亭『香亭雅談』(『芸苑叢書』第二期) 大正九年(一九二〇) 風俗繪卷図画刊行会

⑦又臨池の技を好み、殊に草楷を善くせしを以て詩文及び書を乞ふもの、其門に集まる。鵬齋拒まずして曰く、「心は水の如し。何ぞ門、市の如きを嫌はん。況や身すでに農民に貫す。耕耘筆を以てす、其の宜しき所なり」と。客至るや、酒を置いて談笑し、仍つて酒徒の名を馳す。

—竹林貫一編『漢學者傳記集成』 昭和三年(一九二八) 関書院

⑧龜田鵬齋 晩年に及び志を絶て唯詩書酒畫を以て意に任せ放游した、世人争つて其書畫を求む頗る草書を能くし其書甚だ奇逸の趣があり畫もまた氣韻がある。

—小林雲山編『古今日本書畫名家全伝』 昭和六年(一九三一) 二松堂

⑨兼ねて書を善くした。その草書に独特の妙がある。(森銑三氏小評)
(年老いて) 中風を煩つたが、幸いにして右手だけは無事だったので、書を乞う者が絶えず、それによつて暮らしは裕かであつた。

捐舎の日には、早朝から大硯に十分に墨を磨らせ、以前茶番に使つた引幕を出させて、「先づ今日は是限り」と大書し、これを辞世として、その日の内に歿した。(森枳園『先哲美談』)

—森銑三『人物逸話辞典』上卷 昭和三十八年(一九六三) 東京堂

⑩鵬齋の楷書には、欧・柳の余香を感じさせる面もあるが、本領はやはり行草の奔放さにあろう。みずからを金杉の醉先生と称した鵬齋は、杜甫が「飲中八仙歌」で、「張旭三杯草聖伝う、帽を脱ぎ頂を露わす王公の前、毫を揮つて紙に落

せば雲煙の如し」と歌う酒仙の一人、張旭を思わせる。

—杉村英治「酒と書」(『亀田鵬齋』) 昭和六十年(一九八五) 三樹書房

⑪鵬齋の筆法は、たとえ懷素、良寛の感化を受けたとはいえ、決して流麗でもなければ閑逸でもない。むしろ彼の本来持つ剛直なまでの意志の強さや、豪放磊落の影に見せるその裏返しゆえの優しさが、とくに彼の草書の中に見出すことができるのである。むしろそれは生々しいエネルギーを見せ、アデイス教授をしていわしめた「空中ダンス」を見せるのである。しかもそれは完全なコントロールされた運筆で構成され、限らない自由さと寛ぎ、くねり、曲がり、リズムカルな流れをもつて一字一字が繋がっていく。それは他の誰にも真似ることのできない無限な変化をもつて広がっていき、鵬齋自身の自然な創造的な造形感覚によってまるで彼の筆先を通して迸り出たかのようなのである。しかも彼には十分すぎるほどの言葉や詩に対する教養があり、円熟した筆致で楽しみながら、まるで喋るように書くことができたのであろう。

—渥美國泰『亀田鵬齋と江戸化政期の文人達』 平成七年(一九九五) 芸術新聞社

⑫「秋萩帖」の草仮名は、鵬齋の草書や仮名の原点でもある。…じつは、良寛と鵬齋の草書と草仮名は当然、翠軒の草書(すべての草書作品ではない)も造形感覚がよく似ているのである。いずれも線は概して均一に細く、曲線がくねくねと紙面をはい回っているようで、一行をすつきりとまとめない。一見するといかにも頼りなさそうな筆線が、ばらばらになりそうながら微妙な調和を保ち独自の構成美を持っているのである。…さらに、鵬齋・良寛・翠軒に共通するものとして、草仮名の古典を思い浮かべてしまう。「秋萩帖」は当然だが、それよりも、「自歌集切」、「梅沢本齋宮女御集」とに共通美を感じるのである。…中でも「梅沢本齋宮女御集」は、鵬齋の仮名と翠軒の草書に近い。

—名児耶明「酔」に酔って」(『渥美國泰先生古稀記念小論集』) 平成十四年(二〇〇二) 芸林逍遥木曜会

⑬文化二年八月書には早くも良寛と近似した風に発展してゆく草書体はつきり窺え、来越前に既に幅広い書風を自ら備えていたことを指摘する。…文化九年からの書に楷書は碑文以外にはみられず、帖幅の金看板は草書に移り、文晁や酒井抱一等の絵に鵬齋草書の讚が施されたものが江戸文壇で珍重されたようである。…良寛の影響で書風が一変したとする説は、明治初期『近世偉人伝』(蒲生重章著)等にいち早くみられ、やがて良寛顕彰史上世に普及し始める。

—岡村浩『亀田鵬齋総集』 平成十九年(二〇〇七) 小千谷市亀田鵬齋展実行委員会刊

なお、『誹風柳多留』に

「鵬齋の真名誠忠の仮名を誉め」(八十四篇三十一)

「萬代までも伝えなん亀田が碑」（九十五篇十六丁）

の二句が収められている。ともに、鵬齋の楷書を詠んだ川柳である。ところが、「鵬齋は越後帰りで字がくねり」や「鵬齋の無心の手紙は読めるなり」といった晩年の草書を詠んだ川柳は、『誹風柳多留』ほか江戸時代の川柳には見出せず、それらがいつ頃から詠まれるようになったのかは定かではない。岡村浩氏の考証によれば、「鵬齋は越後帰りで字がくねり」の句は大正期の越後柏崎郷土資料『関] 甲子次郎文庫』に見えるという。従って、やはり明治期以降の良寛顕彰の機運に乗じてこの句も詠まれ、のちに広く伝えられたのであろうと推察される。

二、「題漁樵問答」の書風

「題漁樵問答」は、一頁三行、行五〜七字、十九頁。本文は二八〇字、本文の末に「文化十四年／春二月醉書／鵬齋老人興」の款記がある。

その書の特徴を挙げてみると次のようになる。

① ほぼ独草体で書かれており、二字連綿は十五ヶ所、三字連綿は落款の「鵬齋老」の一ヶ所のみである（図二）。

② 独草体を主としていることから、その多くの起筆は露鋒である。

③ 本文中、同じ文字が複数回登場する場合は、その書きぶりを変え、その際、時には行書体を混えている。（図三―①②）

特に、十二頁一行目の「或薪或械」（図三―③）の四字中には、「或」字が三字あるため、一字ずつ大きさにも変化をつけ、「械」字に至っては、完全な行書体であるが、二字前の「薪」字の「斤」を行書体につけていることが、その予兆のように作用して、収まりがよい。

その字形については、王羲之・孫過庭・張旭・懷素らと酷似または類似するものを見出すことができる（図四）。

字形が類似しているそれぞれの古典の全てを、鵬齋が鑑賞および習得していたと断言することはできず、また、当然のことであるが、一つの文字それぞれに複数の古典の文字が類似した字形をとっていることが多い。

そもそも、草書は草草から発展した簡略体で、変化に富んだ表現が可能なたため、筆者独自のリズムを表現するのにも適した書体である。しかし、その根底には王羲之の『十七帖』や孫過庭の『書譜』などに見るような、典型となる簡化の形式がある。

従来、一般に鵬齋は懷素の影響を多分に受けていると言われて来た。懷素は酒を愛し、酔うと好んで草書を書いた。鵬齋もまた酒を好んだことは、よく知られており、この『醉銘帖』の落款にもまた「醉書」と記されている。

懷素は、酒興に乗じて精神を解放して、自由奔放に筆を揮い、王羲之以来の古い技法を打破したと伝えられるが、それは、王羲之や智永らが築いた正統な書法を十分に習得した上でのことであり、狂草といわれる『自叙帖』にも羲之書法の影響を十分に見て取れる。

鵬齋の『醉銘帖』も、一見してやはり、その書から受ける印象は懷素の風を彷彿とさせるが、『自叙帖』ほど一気呵成に筆を進めた連綿の多用もなければ、また『千金帖』(『千字文』)ほど沈潜した趣もない。揮毫した年齢は、『千金帖』が懷素六十三歳(一説に六十一歳)であるのに対し、『醉銘帖』は鵬齋六十六歳の作であるが、『醉銘帖』には、『千金帖』の老熟した静けさはなく、むしろ六十年代半ばを過ぎてなお、気魄のみなざる作といえよう。

とはいえ『醉銘帖』には、『自叙帖』・『千金帖』に類似した字形がほぼ半数ずつあり、作品から醸し出す雰囲気は懷素のそれに限りなく近く、この両帖の影響は明らかである。鵬齋は、酒をこよなく愛した懷素に、書に限らず内面的な共通点を見出して、心酔していたのであろう。

また、鵬齋の書の中に孫過庭の書との類似する字形が想像以上に多かったのは、今回の調査における新発見であった。

江戸時代の『書譜』の受容については、米田彌太郎氏の「近世日本の『書譜』の受容」(『近世書人の表現と精神―続近世日本書道史論攷―』柳原書店、一九九九年)に詳細に考察されている。

それによれば、『書譜』は唐様の勃興とともに受容されたが、それは書論として先行し、法帖として重要性が説かれるようになったのは、江戸時代後期に至ってからであるという。鵬齋の生きた時代には、既に法帖として出回っており、その証左に、沢田東江(一七三二―一七九六)、市河米庵(一七七九―一八五八)、狩谷掖斎(一七七五―一八三五)、松崎慊堂(一七七―一八四四)、鵬齋門人の巻菱湖(一七七七―一八四三)らの文章には、法帖としての『書譜』の記述を見ることができる。よって、鵬齋が王羲之書法の正統性を説いた『書譜』を読み、また法帖として賞鑑していたであろうことは、想像に難くない。

なお、先の米田氏の同章中に、文政六年(一八二三)に、鵬齋と親しく交友のあった大窪詩仏(一七六七―一八三七)と巻菱湖とが、柴野栗山(一七三六―一八〇七)より、『停雲館帖』の初刻本を借り受け、『書譜』の真跡から摹入した後半の部分のみを、篆刻の名手米川文濤によって複製させ、『玉巖堂蔵版』として、三都書肆から発刊したいきさつを述べ、

菱湖の跋文が写真で掲載されている。

蔡中郎書法有疾洩二勢。余觀孫氏書譜用筆。雖急速常以洩勢遺之所以妙也。譜中所謂勁速者超逸之機。遲留者賞會之致者。即是已後之學者如祝允明輩竟昧斯理。偏側榜戾以求形似。嗚乎失其本也遠矣。米生撫刻精甚因題。

菱湖卷大任

蔡中郎の書法に疾洩の二勢有り。余、孫氏の書譜の用筆を観るに、急速と雖も常に洩勢を以て、之を遺す。妙たる所以なり。譜中に謂う所の、勁速なる者は超逸の機にして、遲留なる者は賞會の致なりとは、即ち是れなり。已後の學者祝允明の輩の如きは、竟に斯の理に味く、偏側榜戾して、以て形似を求むるなり。嗚乎、其の本を失ふや遠し。米生の撫刻、精甚だし。因りて題す。

菱湖卷大任

跋中、菱湖は、『書譜』より「勁速者超逸之機。遲留者賞會之致」を引用し、祝允明（一四六〇—一五二六）などのように、形ばかりを似せる書きぶりを戒めている。なお、米生とは刻者の米川文濤をさす。

また、大窪詩仏は、漢詩において最も有名であるが、一方、能書家でもあり、詩仏の詩集『西遊詩草』（文政二年、一八一九）の伊勢津坂東陽の序文によれば、孫過庭の臨書を日課としていたという。鵬齋を取り巻く環境で、いかに『書譜』が重要視されていたのかを物語る事象である。

江戸時代後期に至って、その書の価値が広く認められた『書譜』であるが、孫過庭は古来最も王羲之の草法を得た人物である。鵬齋の書に、孫過庭の影響を感じられるのは、孫過庭の書の習得も第一であるが、むしろ王羲之の草書を深く研究、消化した結果、孫過庭と似た字形を書くようになった、とも推測されよう。

三、鵬齋の平仮名字源研究

鵬齋は、文政五年（一八二二）に岡田真澄（一七八三—一八三八）の著した『假字考』^{註4}に序を寄せ、翌六年（一八二三）に自身も『国字攷』^{註5}を著している。

国字とは、いわゆる平仮名のことで、『国字攷』の外題に「伊呂波釈文」とあるように、『假字考』も『国字攷』もともに内容は平仮名の字源を一字毎に考証したものである。

鵬齋は「假字考序」および『国字攷』の自序中に、

・弘法大師ニ至リテ漢字ノ草體ヲ假リテ平假名ヲ作レリ。大師ノ平假名ハ全ク漢字ノ草體ヲ假ル故ニ其體甚正クシテ：符牒ノ如キモノニ非ズ。〔『国字攷』〕

・大師製シ玉フハ漢字ノ草體ナレバ：今ノヤウナル訛字ニナリテ體ヲ失フ故ニ是レモマタ日本ノ符牒字ナラン。〔国字攷〕

・遍昭空海氏嘗以四十七字母課和歌。草書作之。〔假字考序〕

というように、平仮名の根底に漢字の草書体があることを一貫して幾度も強調している。さらに、当時その字源となる草書体をおろそかにしていることに注目し、

・但シ後ニ至リテ其ノ本源ヲ辨ヘザルニ因テ、盡ク其正字ヲ失ツテ其體ヲ誤ル。：又ハ兒童婦女ノ事ヲ辨ヘモセザル輩ニ書習ハセ易カラン為ニ、所謂釘ノ折レ蚯蚓ノノタクリシ如ク、形バカリヲ書キ與ヘテ傳ヘ教ユルヨリシテ、今ノ如キ訛字トハナレリ。〔国字攷〕

・是レ偏ニ後人訛畧シテ本體ヲ失フ故ナリ。〔国字攷〕

・然幼童顛蒙。不辨書法。字體失本。従形糢影。追影索陰。鶻突模糊。秋蚓折釘。繆戾殊甚。〔假字考序〕
と、平仮名の形ばかりを似せて書かれている現状を戒めている。

鵬齋にとつて、草書と平仮名は表裏一体のものであり、現状を憂えてばかりもいらなかったに違いない。和様・唐様のまた国字・漢字などといった枠を越えて、鵬齋の学者としての意識が『国字攷』の執筆へと駆り立てたのであろう。

『国字攷』の考証には、『日本書紀』『古事記』『万葉集』など多くの文献から事例を引いており、国学にも広く精通していたことを知る事ができる。また引証文献・資料の中には、『懷素千字文』『高玄岱千字文』等の他に、古筆の名称も見られる。例えば次のようにあげている。

・道風秋萩帖 ・俊頼三十六歌仙 ・行成永承五年麗景殿女御絵合せ

また、書法や文字に関して深い造詣を有していることを自負していた鵬齋は、「幼童顛蒙」の書を「秋蚓折釘」という悪筆のたとえを用いて厳しく評している。しかしながら後世に至って、鵬齋の草書は「蚯蚓書き」や「鵬齋の蚯蚓流」などといわれることがある。鵬齋にとつて、大変不名誉なことであろうと思わずにはいられない。

では、実際に鵬齋の仮名とはどのようなものであったのか。その資料として、我が家の菩提寺である埼玉県熊谷市妻沼の宝積山大龍寺に、鵬齋興拜書の「庚申塔」がある。この「庚申塔」については拙稿「龜田鵬齋の石刻資料」(月刊『郷土文化誌』上州路』三九三号)にも収録したが、その後乾拓のため不鮮明であるが拓を採ったので、改めてその拓(図五)とともに紹介しておこう。

この「庚申塔」は、寛政十二年庚申（一八〇〇）、鵬齋四十九歳の揮毫で、側面には「ぎやうゞ（多）」「わゝ（多）」しむ（者）」「くまづ（可）や」「めぬま」「ほんぞ（志）やう」といった地名の仮名書きがある。その書風は「庚申塔」の楷書二字は、鵬齋の若さのためか、のちの楷書に比べ非常に重量感がある。かな文字もその楷書に従い、非常に伸びやかで、筆線にねばりと勢いを感じさせる。

仮名書きについては、坂口五峰の『北越詩話』上巻（大正七年・自刊）に、

（新潟）三條では、鵬齋のところへ幟の字を書くことを頼みにきた。鵬齋が同席した良寛に水をむけると、良寛は「八まむさま」と書いた。まさか仮名書きをするとは思わなかったので、驚いて見ていると、対句には、「御さいれい」の五字を書く、鵬齋手を打って、これはかなわない、と歎賞した。

という逸話が紹介されている。鵬齋と良寛の出会い、鵬齋が越後へ旅をした文化六年（一八〇九）から文化八年（一八一））、鵬齋五十八歳から六十歳の間とされている。この「庚申塔」は鵬齋四十九歳のものであるから、『北越詩話』中の逸話の約十年前に、鵬齋自身もすでに仮名書きをしていたこととなる。

また、四壁庵茂蔦の『忘れ残り』（安政元年（一八五四）序『続燕石十種』国書刊行会編に収録）に、鵬齋の師である三井親和（一七〇〇—一七八二）が幟を頼まれ、漢字では市井の人には馴染まないからと、「てんわう」「御まつり」と仮名書きをしたので、わかりやすいと評判であった、という話がある。親和の幟は当時大変な人気があり、幟を詠んだ川柳に「法眼やしん和の中をぞうをとり」（川柳評万句合天明三年合印仁一枚目）や「どの祭にも深川の親父でる」（出典不明）がある。

「庚申塔」に書かれた仮名書きは、鵬齋に依頼した人物が仮名書きを要請したとも考えられるが、むしろ町人に親しまれた師の親和の影響もあり、鵬齋も一人でも多くの庶民に理解できるようにと、仮名書きをしたと考えるべきであろう。

おわりに

一般に、「鵬齋は越後帰りで字がくねり」といわれ、越後での良寛との交流によって、良寛の影響を受け、それに似た草書を書くようになった、と認識されているが、筆者は疑問を感じている。第一項に岡村浩氏も述べられているように、鵬齋は来越前よりすでにいわゆる良寛風と評される草書を書きこなしていた。杉村英治氏も「越後における鵬齋は、良寛の宣伝の助役として、そこに登場させられる。恐縮して引き下がるのは、いつでも鵬齋という演出である。」（『亀田鵬齋』一九八五年、三樹書房）と述べておられる。しかし一方で、良寛に筆勢の妙を教えたのは鵬齋である、という逸話

も残されている。それは村山吉廣氏が、古い資料の反故紙の中から発見されたという。良寛優位の逸話ばかりの中、鵬齋優位のこの話は大変珍しい。

国上山に接地せし所に寺泊という所あり。その町に菊屋某氏あり。鵬齋先生、越後遊歴の節、菊屋に逗留す。先生、酔後、揮毫す。揮毫終はらず、大醉熟睡す。良寛来り、先生書し終はらずして熟睡するを見て、たちまち筆を取りて揮毫し去る。先生眠り覚めて驚き、誰なるかを問ふ。家人驚き呆れ、口を揃へて曰く、彼の良寛なる坊主ならんと。主人も怒り罵る。先生、主人の怒りをとどめて曰く、筆勢非凡なり。我良寛を訪ふべしと。翌日、良寛を訪ふ。良寛喜び迎えて、拙僧よりお伺ひ申すべくと存じ候。先生の来臨、恐縮なりとて、先生を師と仰ぎ、草書の筆勢を先生に問ふ。先生、笑ひて曰く、京都賀茂川の水の流るるがごとくすべしと。良寛すなはち賀茂川に到りて水勢を見て帰り、筆勢を工夫致し、ついに草書の妙を得しといふ。

—村山吉廣「鵬齋—鵬田氏三代の儒業—」『斯文』第一〇五号—一九九七年、斯文会

確かに、越後へ旅をする文化六〇八年（鵬齋五十八〜六十歳）以前の鵬齋の作品には楷書と行書が多く、六十歳以後晩年に至る作品に草書が多い。

また、越後で揮毫した紀年の明らかな作品も、実見した限りでは楷書と行書の作品に限られていた。しかし、これは揮毫を依頼されての書体で、すなわちその当時、鵬齋の書の中で人氣のあつた書体が、楷書と行書であつたということでもあろうし、また鵬齋自身の書作に対するこだわりを示すものではないだろうか。第一項に紹介したように、当時の川柳に鵬齋の楷書が詠まれていたことも、その裏付けとなる。

当然の事ながら、その数は少ないが、越後へ行く以前にも、鵬齋は草書を書いている。四十三歳にして「吉田如周先生還曆奉賀序」(図六)を残し、また文化六年四月に越後へ旅立つ直前の三月に、鈴木芙蓉(一七四九—一八一六)の『画酔芙蓉』に草書で序を揮毫しており(図七)、また越後の旅の途中にも、書簡「五十嵐泰庵宛 鵬齋消息」(文化七年、一八一〇)(図八)に仮名に交えて草書が用いられている。これらの書風を見れば、『酔銘帖』との文字の結構、用筆などに特徴の共通点が見られ、中でも『画酔芙蓉』序の書きぶりは、既に世に伝わる「鵬齋風」として完成されている。

従つて、決して越後で良寛に感化を受け、それに似た草書を書くようになったわけではないといえよう。

それでは、晩年の作品に何故草書が多いのであろうか。それはやはり、体力による筆圧に関係があるうと思われる。六

十歳以後の石刻資料に見られる楷書には、強靱な作風が多く見られるが、やはり、年齢とともにその作風は穏やかさを増すようになってくる。文政四年（一八二二）、鵬齋七十歳の頃から、中風で左半身が不自由となり、碑文や序跋文は、長子の綾瀬（一七七八—一八五三）が代筆をするようになる。しかし、草書の作品は依然として多く残しており、没する三年前である七十二歳の款記のある草書作品は、現在でも蒐集家の間で大いなる人気を得ている。

以上、考察を試みた結果、鵬齋も王羲之以来の晋唐の草書の法を、習得し継承しながら、平仮名の字源研究の一端としても草書を深く精察し、次第に独自の表現方法として発展させ、自由闊達に筆を進めていたことが明らかになったといえよう。

今後は、晩年の草書のみを論ずることのないように注意し、また「秋萩帖」や古筆のかな文字からの影響も併せて、更に考察を続けていく必要があると思われる。

【注】 1. 杉村英治『亀田鵬齋詩文・書画集』一九八二年、三樹書房に所収。

2. 岡村浩「幕末近世日本書道史探訪③良寛と鵬齋—合作にみる二人の解逅—」（『書』21、No.13）二〇〇三年、匡出版

3. 柴野栗山所蔵の『停雲館帖』及び『書譜』に関する考察は、柴野由紀女史の「柴野栗山における古碑帖の審定」（筑波大学芸術学研究史「藝叢」2）一九八四年）に詳述されている。

4. 「假字考序」は、『鵬齋先生文抄巻二』（杉村英治『亀田鵬齋詩文・書画集』一九八二年、三樹書房）に所収。

5. 杉本つとむ編『異体字研究資料集成』二期六巻（一九九五年、雄山閣出版）所収。

6. 高玄岱（一六四九—一七二二）江戸中期の儒者、医師。姓は深見、字は子新・斗瞻。黄檗独立に儒・書・医を学ぶ。書は流麗な草書で知られ、林道榮と共に「長崎の二妙」と称された。

7. 大龍寺の本寺は、もと館林にあり、「庚申塔」の側面に「西めぬま」（西妻沼）と記されており、寺の移動と共に「庚申塔」も移されたと思われる。

8. 親和は、はじめ書を禅僧東湖に学び、後に細井広沢（一六五八—一七三五）に学んで、関思恭（一六九七—一七六五）、松下烏石（一六九九—一七七九）、平林惇信（一六九六—一七五三）とともに、沢門四天王と称された。当時流行の文徴明風の唐様書道をよくし、また篆書・篆刻にも長じており、下町の流行書家として声誉が高く、深川油堀に住み「深川親和」とも称された。

9. 10. 11. 図版三点、『江戸文人交友録 亀田鵬齋とその仲間たち』特別展図録（一九九八年、世田谷区立郷土資料館）より転載。

図二、《二字連綿》



① 風雨

(4-1-4.5)



② 層巒

(4-2-1.2)



③ 颯々

(5-3-5.6)



④ 朝来

(8-3-5.6)



⑤ 酒醉

(9-2-5.6)



⑥ 春秋

(12-2-2.3)



⑦ 時来

(12-2-4.5)



⑧ 守命

(12-3-4.5)



⑨ 從教

(13-1-2.3)



⑩ 漁翁

(13-2-2.3)



⑪ 隨意

(14-1-2.3)



⑫ 潮来

(14-3-3.4)



⑬ 醒来

(15-2-2.3)



⑭ 平分

(17-1-2.3)



⑮ 醉書

(19-1-4.5)



① 鵬齋老

《三字連綿》

(19-2-1.2.3)

() 内は、(頁一行一字) を表す。

図三、行書体を用いている箇所



(9-1-1)



(17-1-1)



(13-1-5)



(12-1-2~5)

図四

I. 王羲之と類似している字形



(5-1-6)



『十七帖』



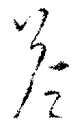
(6-2-5)



『大観帖』



(6-3-6)



『十七帖』



(7-2-3)



『十七帖』

II. 王献之と類似している字形



(9-1-3)



『十七帖』



(17-2-5)



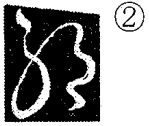
『十七帖』



(4-1-3)



尺牘

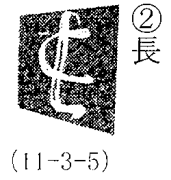


(4-2-3)

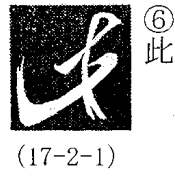
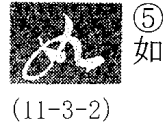
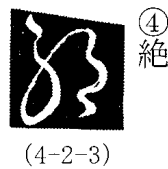
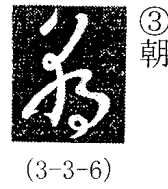
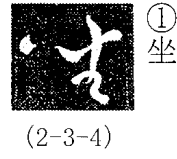


尺牘

Ⅲ. 智永と類似している字形



Ⅳ. 孫過庭と類似している字形



Ⅴ. 張旭と類似している字形



VI. 懷素と類似している字形



⑭ 若

(15-3-5)



『自叙帖
石氏本』



⑮ 醉

(19-1-4)



『自叙帖
墨跡本』



⑪ 来

(12-2-5)



『自叙帖
墨跡本』



⑫ 作

(12-3-1)



『自叙帖
石氏本』



⑬ 云

(13-2-5)



『自叙帖
墨跡本』



⑧ 入

(9-2-1)



『千字文
羣玉堂本』



⑨ 来

(9-3-1)



『千字文
羣玉堂本』



⑩ 月

(9-3-3)



『秋興八首』



⑤ 中

(5-2-4)



『秋興八首』



⑥ 動

(6-1-5)



『自叙帖
墨跡本』



⑦ 朝

(8-3-5)



『千字文
羣玉堂本』



① 長

(3-3-3)



『自叙帖
墨跡本』



② 去

(4-1-1)



『千金帖』



③ 壁

(4-2-4)



『千金帖』



④ 荒

(4-3-5)



『千字文
羣玉堂本』

图五、庚申塔



(正面)



(写真)



(左側面)



(右側面)

図六、吉田如周先生還曆奉賀序（部分）

甲寅十一月廿六日 先生 隨覽
 之辰乃大啓之業延不為之盡所
 濟彼公堂之對之為之簡而九如之
 詩衍我業而於此 先生未索之
 子余之遂不之解之謂不速其
 極染之也 先生曰子孫吾之也
 之成也延以祝余也之矣福也彈
 力之仁則吾之愧焉余曰 先生
 向為恭也 先生龍之數也之也家不
 解守其福也 先生曰勝也日
 先生之家也之也之也之也自
 之皇帝下也之士人其肉能骨也

寧為中百子業可也也也 先生
 其安求也而世得之奇術一投也
 其人蒙其自也之也為官矣其 先生
 之仁可也也仲尼曰仁者壽之也
 先生之雅也也也也也也也也
 先生之業不也也也也也也也
 先生之福也也也也也也也也
 以隨主也也也也也也也也
 實政甲寅仲為廿六日
 關東 鵬齋 謹
 再拜 上

図七、鈴木芙蓉著『画図醉芙蓉』 鵬齋跋文

醉芙蓉容和
 芙蓉容和之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也

年一

芙蓉容和之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也

年二

醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也

年三

醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也
 醉芙蓉之精也

先々の如くおと秋に
 貴家三郎の存存寺
 御秘の如くおと秋に
 虎物も十丁の心算
 心算の如くおと秋に
 貴家三郎の存存寺
 御秘の如くおと秋に
 虎物も十丁の心算
 心算の如くおと秋に

如くおと秋に
 徳介子存存寺
 御秘の如くおと秋に
 虎物も十丁の心算
 心算の如くおと秋に
 貴家三郎の存存寺
 御秘の如くおと秋に
 虎物も十丁の心算
 心算の如くおと秋に

五十嵐泰庵宛
 鵬齋消息